

「通信による学習者支援」プログラムの可能性を探る

- 試行結果を踏まえて -

安場 淳

0. はじめに

「通信による学習者支援」は平成8・9・10年度文化庁委嘱事業「中国帰国者に対する日本語通信教育(試行)(以下「96-98年度プロジェクト」)の一環として行ったものである。このプロジェクトは、学習環境に恵まれない中国帰国者等¹⁾が日本語を習得したいと思ったときに、物理的な距離や時間等の条件に関わらず様々な通信手段によってサービスを提供できるシステムを作っていくことを目標とし、その内容となる学習プログラムや教材などを開発することを目指した(以下、本プロジェクトという)。本稿では、これらの試行の結果を整理するとともにその知見を踏まえ、一応の定着を果たした帰国者等がなお続けて日本語を学習したいというときの日本語にはどのようなものがあり、そのプログラム化がどのように可能かを探ってみたい。その経緯と結果についての詳細は中国帰国者定着促進センター(1999)を参照されたい。

1. 「学習要求」の面から

学習ニーズには、「学習要求」と「学習必要」の2つの下位分類がある。「学習要求」は本人が求めている自覚的なニーズであるのに対して、「学習必要」はその人とその属する社会のよりよい将来のために社会的に学習の必要が認められるニーズを指す。本節では、まず学習要求に焦点を置き、帰国者等が求めている日本語について整理する。

参考とした資料として、所沢の中国帰国者定着促進センター(以下当センター)の修了生等や各地域に在住の帰国者等を対象とするニーズ調査の結果がある(安場他/1997、安場他/1998、平城/1998、およびこれらの調査および各地の調査結果をまとめた中国帰国者定着促進センター/1999)。

これらの結果を学習者の滞日年数・世代・母語の識字力等別のニーズとして以下にまとめた。

1-1. 滞日年数の短いグループ

滞日年数の短い人たちの場合、まず<サバイバルレベルの会話力>と同時に<日本社会についての基本的な知識>のニーズが高く、また緊急性を持つのは当然だろう。特に定着促進センターを経由しない呼び寄せ家族にニーズは顕著である。

*1永住帰国した中国残留邦人とその同伴家族およびその呼び寄せ家族を指す。

学習形態としては、教室での一斉授業や教師とのマンツーマンなど対面型の支援を望む率が自学自習プログラムを望む率より高かったが、これは中国での伝統的な「学校」や「教室」観の現れでもあるだろう。また、この時期のニーズの緊急性から時間的に集中した支援を必要としていることが言えるだろう。

まったくの自学自習で基本的な会話力を身につけられる人はよほど言語環境に恵まれた人に限られるだろう。しかし、生活環境からの言語的インプットが多少なりともあれば、それを有効に利用することは誰にでも可能である。職種にもよるが働いている人であれば、同僚等とのやりとりから最低限のインプットがあり得る。この時期の支援は、時間的・距離的に教室に通えない人であっても、マンツーマンの支援者が訪問や電話・ファックス等の通信手段を用いた支援によって日々の言語的インプットの整理を手伝ったりするなどの支援プログラムが有効ではないだろうか。

問題は育児や介護で閉じこもりきりになる主婦層である。この人たちの場合、家庭内での媒介言語はほとんど母語である。それは言語環境として保障されるべきことでもあるが、家庭外の地域社会との接触の機会がほとんどない状況となると、周囲の日本人側にも彼らの存在を知る機会が与えられないことになり、そのこと自体が問題であろう。また、本人の日本語学習に限っても、たとえ自宅で自学自習を続けても成果を確かめることができないということになる。

このとき、恒常的に彼女らと関わる支援者が出てくれば、その存在は、日本語のインプット源として、また地域社会との接点として意義が大きい。このような閉じこもりがちな人たちに対しては、自学自習プログラムであっても実施の結果地域社会との接点を得られるようになるものでなくてはならないだろう。

1-2. 滞日年数の長いグループ

顕在的な学習ニーズを持っている滞日年数の長い(4年以上とする)人の場合、サバイバルレベルの日本語は習得できている人が多い。その中で20-40代と比較的若く、これから働き盛りとなる二・三世世代には、<免許・資格試験対策など、即戦力となるもの>へのニーズや<敬語など、より洗練された表現力>とともに、学習適性の高い人の場合、<書き言葉への習熟>というニーズが高い。

しかし、前節でも述べたように、育児や介護などで閉じこもりがちな主婦層の場合、地域社会との接点を得られにくいという問題が大きい。そして、続けて

第二・第三子を出産した場合、数年を経てなお地域社会に入っていけず、また、サバイバルレベルの日本語さえ習得のチャンスがないという事態が生じてしまう。彼女ら自身、「日本人の友人がほしい」など、<地域社会に入っていきたい>というニーズはある。しかし、この状況を変えるには、本人たちだけの力では限界がある。むしろ地域からの支援が必要だ。また、日本語学習の機会も得られにくい彼女らのためには、家事や育児等の合間に気軽に自分のペースで日本語の学習を進められる教材が有用である。ニーズの内容としては、<保護者として子どもの保育園、幼稚園や学校と関わっていくのに必要な日本語や知識>へのニーズが高い。この中には学校からのお知らせの読みとりなど、読み書きニーズも含まれる。

ともに留意すべきことは、

- ・彼/彼女らが地域社会に入っていくことを助けるプログラムであること
- と同時に仕事や家事のため、学習時間を確保しにくい人たちであるから、
- ・時間的な制約になるべく縛られないプログラムであること

あるいは

- ・少ない負担で自学自習が可能な教材であること
- が必須条件となる。

2. 「学習必要」の面から

帰国者等を受け入れる地域社会においては、帰国者側と受け入れ日本人側のどちらにも学習必要が生じる。ただし、本稿は帰国者等の日本語学習を通信手段によって直接支援するプログラムの可能性を探るのが目的であるので、ここでは日本人側の学習必要には触れない。また、学習必要と考えられるニーズであってそれが本人に自覚されている(学習要求になっている)場合もあるが、ここでは前節で取り上げなかったもののみを取り上げる。

2-1. 滞日年数の短いグループ

帰国・来日間もない人たちの場合、1の1)で述べたように学習ニーズは比較的明確である。ただし、日本社会についての基本的な知識の領域の中には、日本での生活経験に乏しい彼らにとって想像しにくいものがある。生活習慣の文化差は当然その中に含まれるが、ここでは、将来の生活設計上重要なものとして「情報」

を特に挙げておきたい。

日本社会は高度に情報化された社会であり、正確な情報の収集と活用が進路決定の大きな鍵であることは日本で育った者なら知っていることだろう。しかし、来日間もない帰国者等の場合、経験的な実感が伴っていないため、その重要性を認識しにくい。そこで、地域の情報に通暁した支援者との対面を通して体験的にその重要性を実感できるようなプログラムが必要になる。ただし、これは通信支援のプログラムとして行うのは難しいかもしれない。

2-2. 滞日年数の長いグループ

滞日年数の長い人たちの中でも、

孤児世代の中でサバイバルレベルの日本語さえ習得が困難な人の場合

この人たちのほとんどは日本語習得のあまりの困難さの故、もう学習することを諦めてしまっている。しかし、そうであっても、否、そうであればなおさら、日本語ができなくても地域社会に参画していけるようにするための地域からの支援が必要になるはずである。そして、それと並行して、高齢化する孤児世代にとって今後ますます困難度は増すにしても、本人のニーズがあるなら、日本語が苦痛なく少しでも習得できるような学習支援も忘れてはならないだろう。

若い二・三世世代の場合

二・三世世代の書き言葉への学習ニーズについては前節で挙げたが、これは中国でも書き言葉に親しんできた人に多くみられるニーズと言える。初等教育の途中で来日した二・三世で、来日後適切な学習支援が受けられなかった人の場合、日本語中国語ともに読み書きの世界から縁遠くなってしまっていることが少なくない。しかし、まだ若い彼/彼女ら(以下、彼ら)の日本での将来を考えるなら、読み書きの力は少しでも身につけておいてほしい力でもある。特に、書かれたものから情報を得られるかどうかは、日常生活上も彼ら自身の世界観の拡張の上でも非常に重要なことである。そこで、彼らの場合、<日本語の読み書き力の向上と苦手感の克服>という「学習必要」があると言えるだろう。

また、彼らの場合、話し言葉としての中国語は保持されているが、読み書き力は失われているあるいは未習得の場合が多い。もちろん本人のニーズがある場合に限られるが、<中国語の読み書き力の向上>はたとえ臨界期は過ぎていても、日本語の読み書き力の伸長を促す上からも意義があるのではないだろうか(以上の

記述はCumminsの二言語共有説による)。

ちなみに、本プロジェクトの目的とは若干ずれるが、10代前後までに来日して中国語を忘れてしまった二・三世の場合も、家庭内のコミュニケーション媒体として、また自身の背景を生かした職業上の自己実現のための道具として<中国語でのコミュニケーション力の向上>の意義は大きい。

これらのニーズは、達成感や自己効力感が得られないことから本人たちが諦めてしまって潜在化しているものである。したがって、これを学習目標化して取り組むにはよほどのニーズの掘り起こしが必要となるだろう。

3. ニーズから考えられる学習目標

本節では、前2節を踏まえて設定し得る学習目標とそれに基づいた通信学習プログラム例を考えてみる。ただし、ここでは日本語力の伸長を主目的とするものに限って取り上げた(日本社会についての知識や地域社会への参加を主目的とするプログラムについては別の機会に取り上げたい)。また、主たる対象者には滞日年数の長い人たちを想定した。それは、これらのすでに定着を果たした人たち向けの教材・プログラムに開発されていないものが多いという認識に基づく。もちろん滞日年数の短い人たちのニーズの中にも、既存の教材・プログラムでは対応できず、開発の必要なものがあるが、むしろ滞日年数の長い人向けのものをそちらにも転用できるよう、汎用性を持たせる方向を目指すこととする。

表1に年齢層/母語の識字力/言語の技能別にニーズを整理してみた。20-40代と若い二・三世世代では、母語の識字力に関わらず、一般に日本での生活の中からサバイバルレベルの自然習得が可能である。したがって二・三世の場合はそれ以上を目指すことになる。

表1 考えられる教材・プログラム例

・孤児世代(50-60代)向け ・二・三世世代(20-40代)向け

母語識字力 技能		母語識字力		
		低い		高い
会	機能等	サバイバル・	交渉・説明等、より複雑な表現	敬語等より洗練された表現

話	場面	レベル	交際・交流
読む		身近な漢字	手紙、新聞、広報等
			教養・楽しみのための読書
		免許・資格試験対策	
書く		書類等の記入	近況の手紙
			入社試験の小論文等

日本語書き言葉	低い	書き言葉との親しみの度合い	高い
技能			
会	機能等	正確さ向上、	交渉・説明、敬語等、より洗練された表現
話	場面	子どもの学校や保育園場面、交際・交流	
読む		身近な漢字	読書の楽しみ、手紙、新聞、広報等
			教養・楽しみのための読書
		免許・資格試験対策	
書く		書類等記入	子どもの学校の連絡帳、入社試験の小論文等
		職場日誌等	(手紙)、電子メール
中国語	読み書き力向上	/ /	

4. 96-98年度プロジェクトの結果から

96-98年度プロジェクトでは、ここまで述べてきた事柄を参照しつつ、実際に学習を希望する帰国者等への支援試行を行うことを通してプログラムの可能性を探った。

96-98年度プロジェクトでは、直接学習者を支援するプログラムと支援者を支援するプログラムの二種類の開発を行ったが、本稿は学習者を直接支援するプログラムを中心として報告する。しかし、支援者支援のために開発されたプログラムの中に、今後学習者が通信を主な媒介として直接利用し得るものがあるので、それらについても述べる。支援者支援の試行についての詳細は平城(1999、本紀要所収)を参照されたい。

学習者支援試行の対象者は、まず年齢、滞日年数、母語の識字力の各属性をグループ化して候補者を選んだ。そして、その中で本人のニーズを確認できた人たちを対象としてそのニーズに沿って支援試行を行った。したがって、想定したニーズの枠組みに基づくプログラムというよりは実際の対象者の個別ニーズへの対応なのであるが、できるだけより普遍的で汎用性のあるものを目指した。

なお、市販の教材の中で適当なものがあればそれを使用するという方針で対応したため、開発を行ったものは市販の教材がない分野に偏っている。たとえば、学習適性の比較的高い人が文法知識を蓄積するための教材であれば、自習教材も多く市販されている。それらを改めて開発することは避け、ニーズがあるにも関わらず、商業ベースに乗らないため、なかなか教材化されにくいものを優先させた。

4-1. 試行プログラムおよび作成教材

以下に試行したプログラムや作成教材を挙げる^{*2}。試行結果から各プログラムへのフィードバック事項については所沢センター(1999)を参照されたい。

なお、以下のリストの中で「プログラム」と名付けられているものは、一定の目標に向けて一定の教材を用い一定の学習活動を行うよう定めたものを指している。プログラムは原則として支援者(本プロジェクトでは所沢センターの講師)の存在を前提として組まれている。なお、支援者支援プロジェクトで作成した教材には「支」と付記した。断り書きのないものは本プロジェクトで作成したものである。第3節では対象者の属性別に整理したが、個々のニーズで2つ以上の属性にまたがるものが多いため、ここでは作成物をシラバスないしニーズの種類により分類した。

また、この他に本プロジェクトでは、自学自習を希望する人に教材情報を提供したり、教室での学習を希望する人に教室情報を提供し、教室での学習が生活の中で定着するまでフォローしたりする学習情報提供型のプログラムも実施したが、本稿では取り上げない。詳細は馬場(1998)を参照されたい。

1) 特殊ニーズ即応ないし場面・話題別のもの

運転免許学科試験のための自習教材

... 『こつこつ日本語 運転免許(試作版)』 「支」

語彙文型レベル... 特定できないが、概ね中級か。語彙は運転関連のもの

使用例 ... 学科試験の問題を解き、日中対訳や中国語による解説を必要に応じて参照する。
内容について支援者に尋ねる。

保護者として子どもの学校や同級生の保護者と関わっていくための会話自習教材

... 『日本語会話教材(学齢期の子供を持つ保護者のための)』 「支」

語彙文型レベル... 場面シラバスのため、特定せず。ただし、概ね初級の後半

使用例 ... 会話テープの聞き取り、モデル会話に沿っての発話練習、支援者とのロールプレイなど。日中対訳
テープは育児や家事の合間に聞き流しができる

生活行動場面で用いられる語彙や言い回しを蓄積していくための自習教材

... 『日本の生活とことば「病気」「面接」場面 聞き流し版(仮題)(試作版)』 「支」

*2ここでは、本プロジェクト終了時以降、作成したプログラム・教材(したがって当センターのプロジェクト報告書には未記載のもの)も含めてある。

語彙文型レベル...場面シラバスのため、特定せず。ただし、概ね初級の後半

使用例 ...日中対訳の各行動場面の会話音声テープが付随しており、
育児や家事の合間に聞き流しができる。

近隣交際場面での会話自習教材 ...『近隣交際(試作版)テープ』「支」

語彙文型レベル...場面シラバスのため、特定せず。ただし、概ね初級の後半

使用例 ...会話テープの聞き取り、モデル会話に沿った発話練習、支援者とのロールプレイなど。日中対訳
テープおよびスクリプトがあり、聞き流しができる

自己紹介的な話題に用いる語彙や言い回しの自習教材

...『交流教材テープ(試作版)』「支」

語彙文型レベル...概ね初級後半の語彙および中国東北部の風物関連の語彙

使用例 ...語彙の日中対訳の音声テープの聞き流し、話題を巡った支援者との会
話等

自己紹介的な話題でまとまったことを書いたり話したりできるようになるためのプログラム

...『書いたり話したり』

語彙文型レベル...初級の中～後半程度

主たる学習活動...自己紹介的な内容のテーマ別の読解・作文教材、そのトピックに関わる支援者との電話での会話

使用教材 ...所沢センター作成教材『私のこと』シリーズ、「職安での
問答会話」

2) 日本語の文法文型シラバスに準拠したもの

識字力の問題からいわゆる通信教育における練習が困難な人向けの、自己紹介的な話題を通して日本語
力の伸長を図るプログラム

...『超簡単!知らない間に文法』

語彙文型レベル...入門。ただし、平仮名と簡単な中国語の読み書きはできることが前提

主たる学習活動...自己紹介的な内容についての質問に答える文を書く。その話題を巡って支援者と会話をする(話
題を増やし、文法項目は規則としてというよりは語彙として蓄積していくことを目指す)

使用教材 ...『超簡単!知らない間に文法』

初級の文法項目の理解のための自習教材

...『初級文法教材(中国語解説付き)』「支」

語彙文型レベル...初級前半の文法文型

使用例 ...文法文型の中文解説に従って活用語の変換ドリル、翻訳、短文作文等。気軽に1冊ごとの達成感を

味わえるよう分冊制にした

サバイバルレベルからもう一歩進んで自分の言いたいことを言えるようには
なかなかできない人のための文法文型プログラム

... 『脱サバイバルレベル!』

語彙文型レベル...初級後半の文法・文型

主たる学習活動...文型を含む文の聴解、翻訳および短文作文、電話を利用した支援者との問答練習。聴解シートは聞き取りの弱い年配者向けに作成

使用教材 ... 『脱サバイバルレベル!』^{*3}

3) 自然習得により日常会話は問題ないが、読み書きは苦手な青年のためのもの

・語彙文型レベル...特定は難しいが、中級相当か

「読み」行動の生活化を図るプログラム ... 『読んでみよう』

主たる学習活動...本人の興味や関心により選んだ読みもの(ほぼ総ルビ、語釈つき)を読み、内容についてのごく簡単な質問に筆記または口頭で回答し、支援者とのその内容についての電話やファックスでやりとりする等の活動を通して読むことが苦痛でなくなることを目指す

使用教材 ... 『読んでみよう』シリーズ^{*4}

「書き」行動の生活化を図るプログラム ... 『書いてみよう』

主たる学習活動...自己紹介的な内容について書かれた質問に筆記で回答(単語レベルから文レベルまで)し、支援者とその内容について電話やファックスでやりとりするなど等の活動を通して書くことが苦痛でなくなることを目指す

使用教材 ... 『書いてみよう』(未完)

日本語の正確さを向上させるためのプログラム

... 『パソコン通信、目指せ一発変換』

語彙文型レベル...初級の中程度

*3このプログラムでは『わくわく文法リスニング』(凡人社、1995)テープ教材の使用と別の教材シートの作成について著者の小林典子、フォード丹羽順子、高橋純子、藤本泉、三宅和子の諸氏の許諾を得ている。

*4これまでに一部分を引用して教材化したものは、井田真木子『小蓮の恋人』(1995、文春文庫)、立花隆『青春漂流』(1988、講談社文庫)、王真亮：著/畑中吉彦：訳『出路 - ある中国農村青年の日記』(1992、現代書館)、矢沢永吉『成り上がり』(1980、角川文庫)、大谷昭宏『春美16歳の日本』(1989、朝日ソノラマ)、小林光恵『ナースをねえ!』(1999、幻冬舎)、山田森一『30歳で独立するための本』(1989、PHP研究所)である。なお、採用した作品については、著作権者から引用の許諾を得ている。

主たる学習活動...文型を用いた短文作文とトピック作文をワープロ化し、電子メールで送信して支援者が添削する

使用教材 ... 『絵入り日本語作文入門』(専門教育出版)、『パソコン通信マニュアル』(ビデオ教材)、『パソコン通信マニュアル』

表 2 は 以上 を ま と め た も の で あ る 。

表 2 作成プログラム・教材一覧

分類	目的・目標	文法文型 レベル	知 識	目 標 技 能
場面・ 話題別 ないし 特殊二 ーズ	・病気、面接場面会話	初・後半程度	×	話聴
	・学齢期の子供の保護者に必要な会話	初・後半程度		話聴
	・近隣交際場面会話	初・後半程度	×	話聴
	・自己紹介トピック別の語彙と言ひ回し	初級程度		話聴
	・自己紹介トピック別の作文と会話 ・普通運転免許学科試験対策	初・中 - 後半 中級か？	×	話書 読書
文法文 型積み 上げ	・識字力低い人向け：入門構文で自己紹介	入門	×	話
	・初級文法項目の理解	初級	×	話書
	・脱サバイバルレベルの構文力	初・後半	×	話聴
読み書 き苦手 な青年	・読み行動の生活化	中級程度？		読書
	・書き行動の生活化	初級程度	×	読書
	・正確さ向上	初・中 - 後半	×	話書

4-2. プロジェクトの試行結果に基づく考察

プロジェクトにおける支援試行の対象者数は充分だったとは言えないが、その経験の中から一般化し得る知見が得られたと考えている⁵⁾。その詳細については、中国帰国者定着促進センター(1999)を参照されたい。ここでは、その中から、学習者支援プログラムに還元し得ると思われる事項について挙げる。なお、本稿では支援システム全体に関する知見は省く。

*5 学習者への直接の支援試行の対象者は10名だった。年齢は21～42歳、男女比は5：5、支援開始時の滞日年数は2年～13年、日本語の文法知識などのレベルは初級の中～中級程度であった(ただし、対象者の多くは日本語習得の過程の多くをインフォーマルな学習に依っている。こうした人をフォーマルな学習課程に基づいた言語要素の習得状況という観点でみることは本来適切ではないが、あえて参考までに記したもの)。

a. 支援者の位置づけ

学習者支援では、支援者の役割が非常に重要である。支援者は、学習の過程に"伴走"し、目標の達成度をとともに確認することによって、学習者の地域社会への参入を促すことができる存在である。支援者が同じ地域社会に属する場合、支援者の存在そのものが学習者にとっては地域社会への窓口となる。

支援者はまた、力量的に可能ならば学習上のアドバイスをすることができる。特に「読み」プログラムなど、自学自習の困難なものの場合に"伴走者"の存在価値は大きい。その他にも、

- ・通信機器の使用方法など技術面でのアドバイスをする
- ・話題を巡る会話の力が目標の場合、その話題で学習者と歓談する
- ・地域の方言や職場特有の語彙などが目標言語の場合、インフォーマントとなることができる

などの可能性がある。ただし、支援者はボランティアとして関わっている立場であるので、時間的にも能力的にも過重な負担は望ましくない。

学習者支援の試行においては、支援者は所沢センターの講師であり、対象者は同センターの修了生であったため、プログラムは以下のことが所与の条件となっていた。

信頼関係の構築に時間をかけずにスムーズにプログラムを進めることができる
支援者が日本語やコミュニケーション力の学習支援についてのある程度の知識と技能を有する

支援者に学習者の母語を解する者が含まれるため、学習相談が実施しやすい
したがって、試行で開発したものがそのままでは地域の支援者に使いにくい場合があり得る。もともと本プロジェクトで開発したプログラムや教材は、地域の支援者と学習者がともに生活者として互いに関わっていくことに資するものとなることを目指しているので、そのままでは使いにくいようなら、この目的に沿ったものとすべく改訂することが必要になる。

しかし、どうしても上の日本語やコミュニケーション力の学習支援、学習者の母語、については最低限の知識や技能が必要なものもあるだろう。そこで、
の各々についてある程度専門的な技量を有するコーディネーター(仲介者)を置き、コーディネーターと支援者・学習者それぞれとのミーティングの機会をプ

プログラムに組み込んでおいた方がよい。なお、支援者の知識や技能の多寡に関わらず、学習者側は過度に期待してしまう可能性があるため、コーディネーターはその期待が支援者の精神的負担とならないよう留意する必要もある。

については、逆に試行ではこれと裏表一体の、「以前の"師"との関係や所沢センターという機関との関係が影響した慮りが働く」というデメリットが生じがちであった。地域の支援者の場合、その心配はなく、信頼関係の構築自体を大きな目標として取り組み得る。両者の関係が機関対個人ではなく、地域の個人対個人との関係とみなされやすいため、信頼関係が深まれば、学習者がより地域社会に入っていくやすいというプラス面の効果がある。

もちろん個人的な関係の深化は別の問題のもとともなる。両者間で文化差によるトラブルが起きた場合に個人的な関係のこじれとなりやすく、割り切った解決方法がとりにくくなりがちであるからである。この場合も、同様、コーディネーターが第三者として介入する余地をプログラムに組み込んでおくことが望ましい。

の母語については、地域の支援者の場合、そのコミュニケーション力のレベルによって問題の性質が変わってくる。支援者が学習者の母語を自身の母語としてあるいは母語並みに操れる場合、日本語のインプット源としての役割は薄れがちである。何となれば、容易にコミュニケーションできる中国語を捨ててあえて日本語だけで話すことは、学習者には難しいことであるし、支援者も交流が第一の目的であるなら、積極的に学習者の母語を用いることは自然なことでもある。この場合、この支援者には学習相談の相手やコーディネーター的な役割を期待する方向が考えられる。

反対に、支援者の学習者の母語でのコミュニケーション力のレベルがそれほど高くない場合は、一支援者として互いに相手の母語を学び合うことで信頼関係をより深めることに資することが考えられる。

以上のように、異文化間の人間関係および日本語学習について、ある程度経験と勘の働くコーディネーターが必要であることが示唆される。地域にそのような存在の人がいれば理想だが、いない場合、遠隔地の者であってもある程度の役に立てる人をコーディネーターとして位置づける可能性はあるだろう。

b . (通信)媒体の、手段としてあるいは目標としての可能性

ワープロ/パソコンは今や日本の青年層の多くが所持する機器である。帰国者青年の中にもパソコンに興味を持つ人は多い。このことと、ワープロが仮名を正確に入力しないと正しく漢字変換されないことの2点から、パソコンは正確さ向上プログラムの非常に有効な手段であると言える。将来は電子メールやホームページという新たなメディアでのコミュニケーションを目的としたプログラムも可能性があるだろう。

たとえば、文字メールの通信が可能な携帯電話等のメディアでは、話したい言葉をそのまま文字に置き換えて送信することが容易にできる。読み書きの苦手な青年にとっても、文を書くことの第一歩として、目標とも手段とも位置づけられる可能性がある。

また、ファックスはデジタル化時代への過渡的な媒体とされているが、現時点では利便性が非常に高い(詳細は中国帰国者定着促進センター/1999)。

c . 本人のニーズに沿うことの意義

帰国者等のほとんどは、今よりも生活水準を向上させたいという思いを持っている。その際、中国帰国者という自身の特性を生かせる職業として「日中貿易」という夢を挙げ、そのために日本語を勉強したいという人も少なくない。中国社会の劇的な変化により、夢が夢でなくなる可能性が大きくなったことも影響しているだろう。

今回の支援対象者や候補者の中にも「できれば貿易を」「できれば商社に就職して...」という人は少なくなかった。しかし、これだけではニーズとしてはあまりにも漠然としているし、それらの人たちの現在の日本語レベルからいってもかなり飛躍がある場合がほとんどだった。それでも、そのニーズに即応したプログラムを組み立てる方が本人の意欲を持続させるだろうと想像できる。たとえば、同じ目標であっても、素材に「貿易」関連のものを用いるだけでより積極的な反応が得られる可能性がある。たとえハードルが相当高くとも、その方が結局、学習効果も高いプログラムとなるのであれば、今後ぜひ試みたいことである。

本人の興味や関心に沿うことの重要性は、「『読み』行動の生活化プログラム」にも言える。試行の結果をみると、傾向と言い切るにはケース数が少ないが、こちらからいくつか候補作を提示した中では、やはり中国帰国者や中国関連の読み物が選ばれており、物語中の登場人物の境遇が自分自身と近いことが、言語要素の難易度よりも読みへの意欲に大きく関与していると思われる。

ただ、支援者が学習者のニーズに沿おうとするときに、ニーズの揺れ幅の大きくなりがちな青年期の学習者の場合、それを安定させることが難しい場合もある。支援者・学習者間の話し合いと試行の中で、実現可能な目標と実行可能な学習活動に落ち着かせていくわけなのだが、その作業に相当の手間を要するのである。さらに、そのための学習相談の時間があまり長く続くと、支援者側が学習素材を提供しないことへの不満が生まれかねない(eで後述)。

d . 他領域の資源を日本語学習支援の資源とすることの可能性

「読み」プログラムの例だが、児童文学に分類されるジャンルの単行本の中には、総ルビが打たれていたり語彙が限定されていたりと、形式面からはそのままあるいは補助の度合いが低くて済むものがあり得る。その中で、成人である彼らのニーズに応えられる内容のものがあれば、それはそのまま教材となり得る。

また、今後、日本語学習者以外のために設けられた制度の援用の可能性も視野に入れたい。たとえば、公共図書館の中には視覚障害者のためのテープライブラリーを備えているところがある。日本点字図書館やいくつかの公共図書館に問い合わせたところでは、これらの資源は視覚障害者でないと利用できないということだった。障害者福祉という予算枠の問題であろう。しかし、どこか一つの図書館においてでも、日本語の文学等に音声で親しみたい外国人のニーズに応えるものとしてこの制度の援用が認められる可能性はないだろうか。

e . 「生活者にとっての学習」という概念を拡張するプログラムの必要性

帰国者等の多くにとって、中国で長年培われた「学習」観あるいは「学校」観は相当に強固なものである。その中で、「学習」は相当敷居の高いものと位置づけられてしまっていることが多い。そのため、日本語の勉強をもっとやりたいと思っても、具体的にという段になるとなかなか始められないことが多いし、始めてからも時間的・精神的な余裕がなくなって中断することが多い。

また、a と重複するが、彼らが伝統的な教室学習観をもっている場合、支援者に教師としての役割を期待する度合いが高い。そうすると、「伴走」する支援者の位置づけそのものに不満を持つことがあり得る^{*6}。実は、このような学習観の柔軟化こそが学習相談の果たすべき役割なのである。しかし、生活に追われる彼らにとっては、そのための時間を割くことも難しい場合が多い。

今後の課題は、学習者が自分で学習を進めやすいスタイルや方法・内容について研究と実践を深め、次のことを実現することであろう。

・「生活の中で行う学習」という概念の広がりができるだけ学習者自身が実感できるようなプログラム

これは取りも直さず、環境を「資源化」することである。容易に実施できる例としては、日々の生活の中ですでに習得している語彙を意識化するためにいつどこでどうやって習得したかを振り返って整理してみる、より効率的な語彙の蓄積のためにどのような方策があり得るか支援者とともに研究してみるといった活動がある。その際、こうした活動自体も学習であるということを学習者に意識してもらえらるための強化が不可欠になる。

*6にも関わらず、支援者を教師と見なしている以上、面と向かってその不満を訴えたりすることがなかなかできないため、支援者がニーズを把握しにくくなることが多い。

また、

・支援者の位置づけをできるだけ体験的に了解してもらえようなプログラムも必要だろう。これは支援者と学習者がともに何かを成し遂げる活動を通しての形が望ましい。具体策は今少し試行を重ねる必要があるが、おそらく、これらのことは支援者と学習者という関係づけを離れた2人の人の中での日常的なやりとりに限りなく近い形で実現されるはずである。

以上、通信による学習支援については多くの課題が確認された段階である。今後は、実践を積み重ねてそれぞれの課題を一つずつ解決していくことが残されている。

最後になるが、パイロット支援の対象者となって下さった所沢センター修了生をはじめとする帰国者等の皆さん、著作の引用等を快諾して下さい下さった著作権者諸氏に感謝の意を表したい。

【引用 参考文献(50音順)】

麻生誠(1993)『生涯発達と生涯学習』放送大学教育振興会。

岡本包治編(1992)『生涯学習プログラム開発』現代生涯学習全集4。

小池源吾(1992)「学習相談」、岡本包治・山本恒夫編『生涯教育とは何か - 課題から実践へ - 生涯教育対策実践シリーズ<1>』所収、ぎょうせい。

田中望・斉藤里美(1993)「日本語教育の理論と実際 - 学習支援システムの開発 - 」大修館書店。

中国帰国者定着促進センター(1999)『平成8・9・10年度文化庁委嘱事業 中国帰国者に対する日本語通信教育(試行)報告書「通信」による日本語学習支援の試み』。

ドレイブス、ウィリアム・A(1990)『研修・訓練における成人指導の方法』財団法人全日本社会教育連合会。

縫部義憲(1999)『入国児童のための日本語教育』スリーエーネットワーク。

馬場尚子(1998)「各地域の定住帰国者に対する日本語教室情報提供の試み」『中国帰国者定着促進センター紀要』第6号。

平城真規子(1998)「特定地域に暮らす中国帰国者へのニーズ調査 - 鹿児島県N市の場合 - 」『中国帰国者定着促進センター紀要』第6号。

平城真規子(1999)「特定地域を対象とした通信による支援者支援の試み - 鹿児島県名瀬市と長野県飯田市の場合 - 」『中国帰国者定着促進センター紀要』第7号。

藤岡英雄「学習関心の把握」(1989)『生涯学習促進の方法』生涯学習講座

第 5 巻」佐藤守・稲生勁吾編。

安場淳・馬場尚子・平城真規子(1997)「定住している中国帰国者の日本語学習ニーズ等」についての調査報告 - その 1」
『中国帰国者定着促進センター紀要』第 5 号。

安場淳・平城真規子・馬場尚子 (1998) 「定住している中国帰国者の日本語学習ニーズ等」についての調査報告 - その 2 :
呼び寄せ家族の場合」『中国帰国者定着促進センター紀要』第 6 号。

安場淳 (1998) 「学習困難な中国帰国者の日本語をはじめとするニーズ」『中国帰国者定着促進センター紀要』第 6 号。

資料「帰国者等個人に対する支援の枠組み」

対象：相談者本人(成人の帰国者等個人)。ただし、その効果的な支援のために働きかける対象は本人に限定しない場合もあり得る。本人に影響を与えるネットワークやグループ内の個人、ネットワークそのものである場合も。

方法：情報提供 / 教育支援的介入 (態度 知識 技能訓練) / 他分野の専門家とのコンサルテーション / 非専門家(ボランティアであることが多い)との連携 / (緊急を要する場合、危機介入...これ自体が専門家へのリファー)

領域：Quality of Lifeに関わる全分野を視野に入れる(重複あり)

以下の分類は宮島喬、梶田孝道編(1996)『外国人労働者から市民へ』、植村勝彦(1985)「社会生活ストレスの構造」中に引かれている金子(1982)「コミュニティの社会計画」等を参考にしたが、暫定的なものである。

生存権に関わるもの...住宅供給 / 住環境 / 雇用 労働条件に関する問題 / 安全確保 / 医療 / 精神保健 / 社会保障：福祉、(年金) / 日本語習得 /

家族生活...こども本人(学業 / いじめ / 進路 / 文化的アイデンティティ / 母語あるいは日本語での基本的な思考言語の獲得)、
...こどもとの関係(媒介言語(母語) / 価値観の文化差)、...高齢者(介護 / 尊厳)、...ジェンダー役割(育児で社会から孤立する母親など / 介護)

家族外の社会生活...日本人とのソーシャルサポートネットワークと日本語習得 / 母語話者や母文化保持者とのソーシャルサポートネットワーク

これらのうち、日本語習得および日本人とのソーシャルサポートネットワーク促進に関わるものを本プロジェクトで直接扱い、それ以外の領域については専門家にリファーできる体制を作っていく

支援過程のモデル：何らかの問題や課題を抱える帰国者個人に対して以下の手順でサービス提供を行う

- 1)問題の実態を把握する
- 2)問題の性質や領域、原因などを特定する
- 3)他分野の専門家にリファーすべきかどうかの判断を行い、必要なものはリファーまたは紹介する
- 4)日本語習得 / ソーシャルサポートネットワーク促進のための支援を行う
- 5)評価活動と目標 / 内容 / 方法の軌道修正
- 6)最終評価活動

学習者支援の要件項目

a 学習者特性：ニーズ / 学習適性 / 日本語力 / ライフステージや家族内役割分担 / 支援者との物理的距離 / 居住地域

b 支援の形態・方法：

1. 学習活動型 ...通信教育 / 通信教育 + スクーリング / スクーリング
2. 自学自習者用学習相談型
3. 教室に通うための情報提供学習相談型

用語の定義は以下の通りとする

・スクーリング：学習者と支援者が直接対面して学習活動やカウンセリングを行う活動

学習相談：学習目標、内容、過程等について学習者と話し合っ決めていく活動で対面も非対面もある

学習活動：支援者と学習者が教材を用いて学習を進める活動

通信教育：通信手段を主に用いた学習活動

c 条件：費用 / 場所 / 距離 / 時間帯 / 期間

d 支援者：立場 / 日本語教育の技術・知識 / 性別、年齢、職業 等

e 支援過程：上述の支援過程モデルを参照